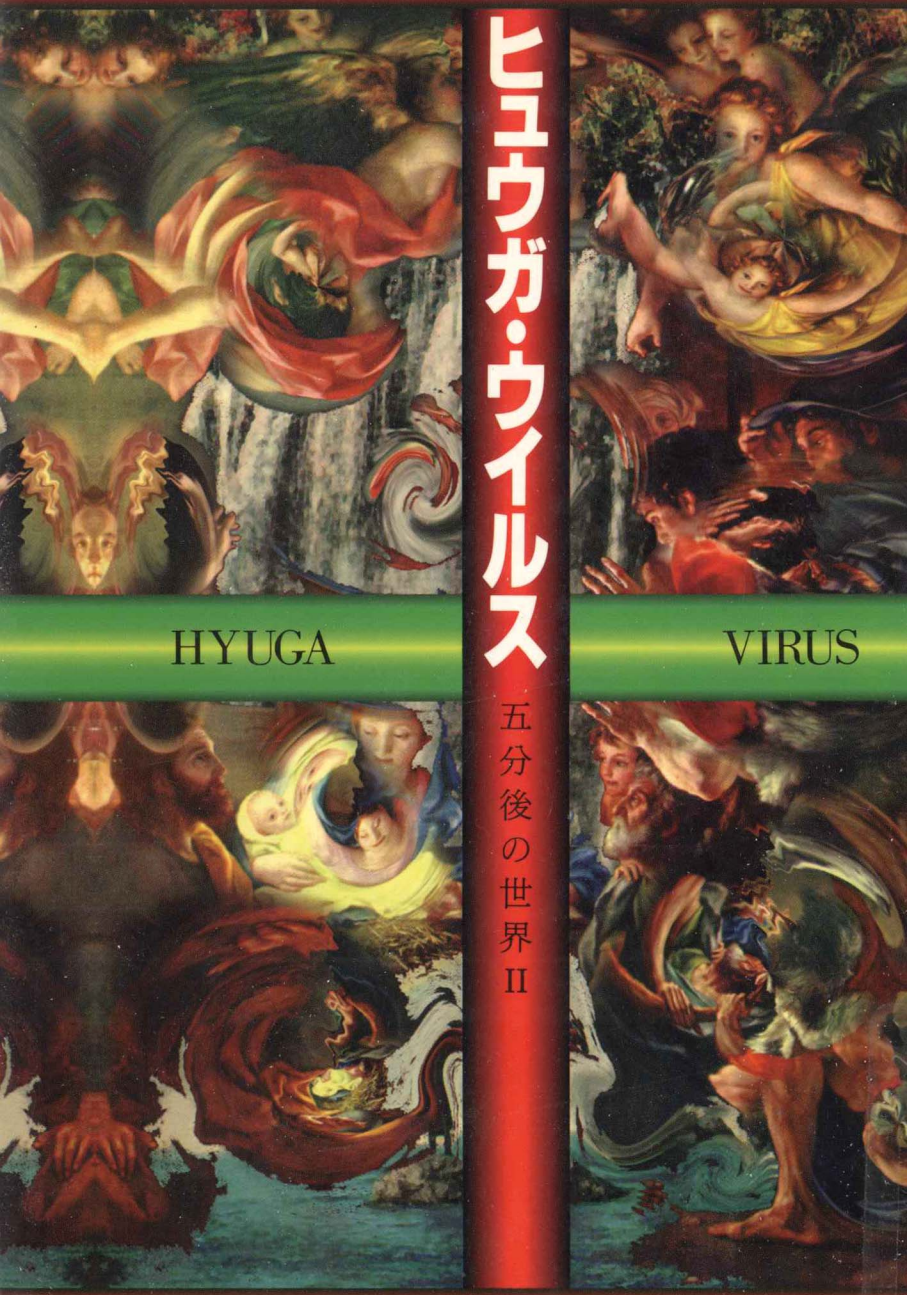
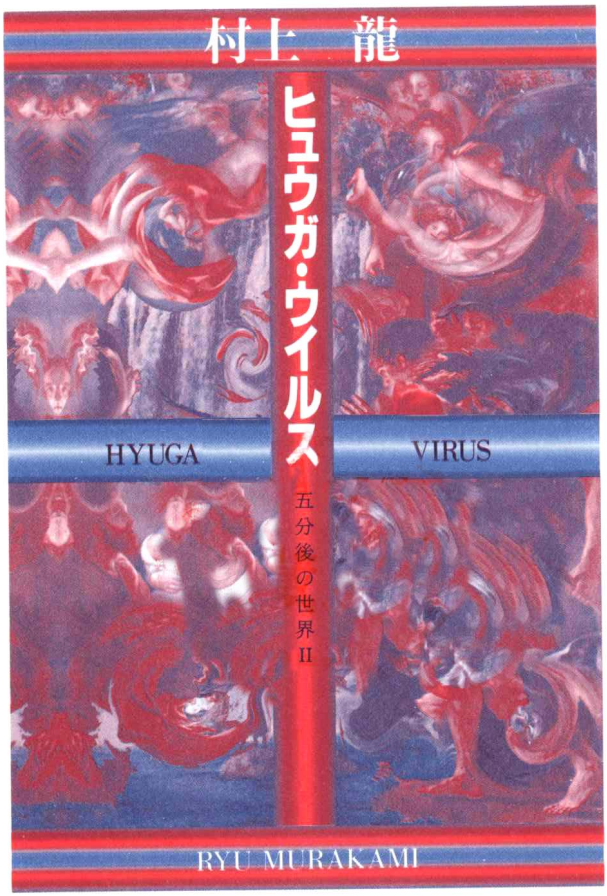
村上　龍

ヒュウガ・ウイルス

五分後の世界II

HYUGA VIRUS





幻冬舎

〈著者紹介〉
村上　龍　1952年長崎県佐世保市生まれ。武蔵野美術大学中退。大学在学中76年、『限りなく透明に近いブルー』で群像新人賞、芥川賞を受賞。主な著書『コインロッカー・ベイビーズ』『愛と幻想のファシズム』『トパーズ』『イビサ』『ピアッシング』『五分後の世界』など。

ヒュウガ・ウイルス　五分後の世界II
1996年5月8日　第1刷発行

著　者　村上 龍
発行者　見城 徹

発行所　株式会社 幻冬舎
〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)
03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©RYU MURAKAMI, GENTOSHA 1996
Printed in Japan
ISBN4-87728-108-8 C0093　1456円

ヒュウガ・ウイルス　五分後の世界 II

装丁・装画　横尾忠則

作品名「ヒュウガ・ウイルス」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

プロローグ　キャサリン・コウリー――5
第1章　レトロウイルスのように――29
第2章　細胞外マトリックス――51
第3章　エンドサイトーシスで細胞質へ――80
第4章　リソソーム・残骸の街――102
第5章　壊死したミトコンドリア経由――108
第6章　ゴルジ装置・腐乱酵素放出――132
第7章　モリソンホテル・免疫グロブリンの群れ――157
第8章　核酸の中へ・終止コドンの発見――175
第9章　逆転写酵素の秘密――193
第10章　ヒュウガ・ウイルス――222
エピローグ　キャサリン・コウリーの、ジャドソン・カワカミへの手紙――232

「五分後の世界」梗概

現在より五分間時空のずれた地球では、もう一つの日本が戦後の歴史を刻んでいる。

日本は太平洋戦争において沖縄戦ののち、広島、長崎、小倉、新潟、舞鶴に原爆を受けながらもアメリカ軍と本土決戦を行なった。その結果、戦闘、空襲により日本全土は焦土と化し、連合軍の占領下に置かれることになった。北海道・東北が旧ソ連、それを除く本州と九州の大半をアメリカ、四国をイギリス、また権利を主張した中国が西九州を分割統治した。その時点で日本の人口は、八千万人から二千三百万人に減少していた。本土決戦直前に勅令として出された全国民を兵士とする『義勇兵役法』と、旧ソ連軍による虐殺、それに全土に蔓延した飢餓、疫病のためである。そして、軍指導者はすべて逮捕、処刑された。大日本帝国は消滅したのである。

帝国崩壊後まもなく、ビルマ、ニューギニアから帰還した僅かの将校団が、旧長野に集結した。国家消滅の危機に際して新たな日本を興すことを志した彼らは地下に潜った。日本国地下司令部の誕生である。後にアンダーグラウンドとも呼ばれる日本国は、無数のトンネルを地底にめぐらせながら、国家を形成していった。

やがて、地下数百メートルに二十六万の人口を持つ日本国は冷戦を利用し極めて機能的で強力な戦闘的小国家に生まれ変わった。日本国軍（ＵＧ軍）は、本土に駐留する国連軍相手にゲリラ戦を繰り返し、反帝国主義を掲げる傭兵として海外の内乱や紛争、革命にも参加した。五九年のキューバ革命時にも、フィデル・カストロの要請を受けたＵＧ軍は、竹内剣次大尉率いる小隊を派遣し革命軍を助けた。

一方、分割統治され「技術移民」を海外から受け入れた日本本土では、オールドトウキョウ、オサカなど都市部を中心に巨大なスラム化が進んだ。移民政策そのものが失敗し、各スラムに戦後誕生した混血児達の多くは、国連軍駐留による閉塞感と不安感から、暴動、略奪に明け暮れていた。混血児達は、強者である国連軍に徹底抗戦を挑むアンダーグラウンドを尊敬し、憧れていた。

七二年に日本国地下司令部を視察した晩年のアルベルト・アインシュタインに「いかなる意味の差別もない国はＵＧだけである」と賞されたアンダーグラウンドは、戦闘国家でありながら高度な文化、芸術、科学を誇っていた。全世界が常に注目する音楽家ワカマツは、まさに日本国の象徴であり、ＵＧ生化学研究所が開発した『向現』は、副作用のない完璧な向精神薬として、貨幣さながらに世界中のブラック・マーケットで取引きされている。

プロローグ　キャサリン・コウリー

ＵＧの兵士達が捕虜の武装蜂起の鎮圧にやって来る、というニュースが流れた時、キャンプの中に緊張が満ちていくのがわかった。ＵＧというのはアンダーグラウンドの略で、日本に駐留するアメリカ軍兵士の間では既に立派な公用語になっている。

「ヘイ、キャシー、やっとＵＧの連中を見れそうだな」

一ヶ月の滞在中すっかり顔馴染みになった海兵隊の警備将校から、キャサリン・コウリーはそう声をかけられ、腰のあたりを軽く平手で叩かれた。アメリカの放送局だったら今の行為はセクシャル・ハラスメントとして問題になっただろうな、とキャサリン・コウリーは思いながら、表情を変えずに、まあね、とその若い将校に応じ、ビデオカメラの準備を続けた。

アメリカ陸軍と海兵隊が管理する旧ソビエト軍捕虜のコンセントレーション・キャンプ、Ｂ－４。八年前にソビエトが崩壊してから、日本における断続的な米ソの武力衝突は、両国の公式の

発表ではまったくなくなり、アメリカ軍はそれまで四つあった捕虜収容所のうち三つを漸次閉鎖していた。当然、B－4は他の三つから移送されてくる捕虜でふくれ上がることになった。

B－4は、アンダーグラウンドがそこにあるとされている旧長野の北東部の海沿いの沼地にある。なぜこんな不毛で不便な地に収容所を造ったのか、キャサリン・コウリーにはいくら考えてもわからなかった。一ヶ月前にこのキャンプの暴動の取材に来てから何人もの警備将校にそのことを質問したが、誰も知らなかった。アメリカ軍の司令部のあるオールドトウキョウから充分に遠くてとりあえず道路がつながっている場所だからじゃないのか、ここじゃいつもそんな単純な理由でものごとが決められてしまうんだ、一人の警備将校がそう言ったが、たぶんそんなものだろうとキャサリン・コウリーは思った。B－4の混乱は想像を絶していた。そして、B－4に住むすべての人間達がその混乱を作り出し受け入れていた。その混乱を構成していたのは、悪臭と無知と怠惰とあきらめと病気と不潔さだった。ひょっとしたら、と思うとキャサリン・コウリーの胸は高鳴った。ひょっとしたら、UGの兵士達がこの汚ならしいB－4をすべて破壊してくれるかも知れない。カメラマン用のベストにバッテリーとカセットテープを詰め、超小型のベータカムカメラに迷彩が施されたカバーを付ける。ベストにも、カバーにも防弾用のケブラー繊維が織り込んである。ビデオカメラの準備を急ぐキャサリン・コウリーの傍を完全装備の海兵隊員が慌ただしく通り過ぎていく。そのうちの一人にキャサリン・コウリーは、UGの兵士はどこから来るのか、と聞いた。緊張で青ざめている海兵隊員は首を振る。

「わかるわけないよ、あいつらはいつも突然現われるんだ、現われるっていうか、気が付いたら、そこにいるのさ」

B－4のヘッドクォーターオフィスから一歩外に出ると、いつもの匂いがまず鼻をついた。夜間は、海兵隊と陸軍の将校・兵士宿舎の背後の沼地から海の方へと風が吹くために、腐った水の匂いがする。沼地には決して足を踏み入れないようにとコウリーは言われた。沼に沈んだ植物の葉、特に柳の葉の成分が変化して有毒なガスが発生しているのだそうだ。

遅い春の空にはほとんど雲がなく、半月が輝いている。B－4専用の小規模な発電所は、捕虜その他の住民がでたらめなやり方で電気を盗み続けたために、半分しか機能していない。収容所全体は薄暗いまま闇に溶け込み、空はすみずみまで星が見える。

コウリーは他の兵士達と同じように身を低くして、未舗装の道路を海の方向へと進んだ。夜には、捕虜収容施設が並ぶ海側に風が吹いていく。さまざまな匂いが含まれていて、風そのものはなまぬるい。B－4には四千人以上の旧ソビエト兵捕虜と、それとほぼ同数の民間人が居住すると言われている。収容所に限らずアメリカ軍の基地や施設のあるところには必ず別種の日本人が住む集落がある。アンダーグラウンドはそれを非国民村と呼び、アメリカ軍は「別の村」と呼ぶ。そこの住人は非常に貧しく、卑屈で、常に百人から数百人で羊のように群れ、不潔な環境で教育もなく原始的な生活をしている。彼らをネイティブ・ジャパニーズと呼ぶアメリカ軍兵士もいる。

半世紀前、ほぼ日本全土が戦場になった時、国民義勇軍という組織で戦った者達の子孫がネイティブ・ジャパニーズなのだ。バンザイ突撃を繰り返しながら生き残った者の子孫なのだから、死を恐れない誇り高い人々を想像しがちだが、彼らは違う。ボロをまとい、電気も水道も汚水処理設備もないバラック小屋に住み、小さな畑を耕し鶏を飼い、アメリカ兵や旧ソビエト兵捕虜に細々としたものを売りつけて暮らしている。B－4の捕虜の数がふくれ上がり、警備のアメリカ軍の規模も大きくなるにつれて、ネイティブ・ジャパニーズの村もしだいに増えていった。アメリカ軍は面倒を嫌って、つまり電気を盗まれたり物乞いの子供達がたむろしたり売春の女達がうろつくのを嫌って、集まってくるネイティブ・ジャパニーズ達に軍の敷地にバラック小屋を建てることを許さなかった。その結果、「別の村」は、海側の旧ソビエト兵収容施設に隣接して、できていった。B－4の収容施設は、他のコンセントレーション・キャンプが閉鎖されるたびに無計画に増築が重ねられたので、建物の配置もそれに従う鉄条網のレイアウトにも秩序がない。そのまわりに「別の村」が広がり、さらに旧ソビエト崩壊後に日本海を渡って密航してきたロシア人までが小屋を建てて住みつくようになり、怪し気な商店や食堂、それに工場までができて今では人口八千人のグロテスクな町と化してしまった。

捕虜の暴動は、一人の旧ソビエト兵士が数人の海兵隊員に殴り殺された事件を直接のきっかけとして発生し、海を越えてきたロシア人達が持ち込んだ武器とバラック小屋で作られる手製の拳銃や手榴弾によって支えられた。海兵隊員が捕虜を殺したのは、本州北部にある旧ソビエト軍の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

アメリカ兵捕虜収容所の実態がテレビによって明らかになったからだ。アウシュヴィッツを連想させるその残酷な映像は、ウクライナ人のテレビクルーによって撮影されたもので全世界に衝撃を与えた。アメリカとロシアの政府は冷戦の終結を発表したが、ここ日本において正式な停戦が行なわれていないのはそのテレビ映像のせいだとされている。

キャサリン・コウリーはアトランタ郊外の自宅でその映像を見た。コウリーはニューヨーク州北部、キャッツキルのふもとのアイリッシュが多く住む寒い小さな町で生まれた。両親ともにアイリッシュで十一人兄妹の八番目だった。ジュニアハイの頃からカメラに興味を持ちフィルムやビデオの技術はブルックリンのクレイトン・カレッジで学んだ。陸上の長距離と水泳も得意だった。常にショートカットで、特に改まったパーティやセレモニー以外ではスカートを穿いたことがなく、レスビアンだといううわさを流されたこともある。二十歳になってすぐマンハッタンのクラブで恋人を見つけた。ジャドソン・カワカミという名の彼は日系人だった。アメリカ人兵士と結婚して日本を離れた婦人を祖母に持つ恋人は、しきりにアンダーグラウンドについて熱っぽく語った。ジャドソンは戦闘国家であるアンダーグラウンドに強い誇りを抱いていた。コウリーにはまったく理解ができなかった。イデオロギーも宗教も持たずただひたすら米ソ相手にゲリラ戦を続けるアンダーグラウンドのことは、小さい頃から教科書で狂気の集団であると教えられてきたからだ。ジャドソンは極めておだやかな性格の持ち主であり、またコウリーに日本語を教えてくれた。四年間付き合ったが、結婚には至らず二人は別れた。だが別れてからもジャドソンは

いつもコウリーに優しく、定期的に電話や手紙をくれた。ジャドソンの勧めもあって、コウリーは日本語学習を続けた。フリーランスのニュースカメラマン兼ジャーナリストになったコウリーにとって、日本は憧れの地であり続けたからだ。ジャドソンのアンダーグラウンド礼賛に傾倒したわけではない。むしろ逆で、どうしてこれほどおだやかで優しいジャドソンが祖母の故国とは言え狂気の戦闘集団を崇(あが)めるのか付き合いが深まるにつれて不可解さは増し、それは別れの原因の一端になったほどだ。コウリーが日本に憧れたのは、そこがフリーランス・ニュースカメラマンの出世の場であったからだった。日本からは常に強烈なニュースが発信された。ソビエトが崩壊して冷戦が終わった時のアンダーグラウンド司令官ヤマグチのコメントにそれは象徴される。

「冷戦の終結は新しい支配の始まりに過ぎないとわたし達は判断した、日本国は少数の先進国の正義なき支配に対し戦いを続行する」

コウリーにチャンスが訪れた。B－4の取材を続けていたCNNのカメラマン兼ジャーナリストが重傷を負ったのだ。空港にジャドソンが見送りに来てくれた。実際のアンダーグラウンドのことを手紙で知らせてくれ、彼はそう言った。キャサリン・コウリーは二十八歳になっていた。ジャドソンにはまだ手紙を書いていない。接した日本人はネイティブ・ジャパニーズだけだ。彼らのことを知ればジャドソンは悲しむだろうとコウリーは思った。

オールドトウキョウからずっと続いている未舗装の細い道路をからだを低く屈(かが)めて数分走ると警備隊側の防御ラインが見えてくる。兵士の間では囚人道路と呼ばれている砂利を敷きつめた小

道には一定の間隔で歩兵戦闘車M3が待機している。ディーゼル機関の排気ガスがまるで霧のように立ち込めて強力な投光機が各車両に搭載されていた。コウリーは一台のM3にもたれかかって煙草を吸っている広報担当の将校を見つけて、アンダーグラウンドの暴動鎮圧の後オールドトウキョウへ戻るヘリコプターに撮影済みのビデオテープを積んで貰えないかと頼んだ。CNNはUGの宣伝をするのか、と将校は皮肉を言ったが、すぐに許可してくれた。B-4に到着して以来、コウリーは兵士達と同じ状況下でまったく不満を洩らさず野戦携行食を食べ野営にも耐えた。タフな女だとその将校は好感を持っていたのだ。

「キャシー、あんたは戻らないのか？　ヘリに乗せるのはビデオテープだけでいいのかな？」

将校にそう聞かれて、しばらくここに残る、とコウリーは答えた。だが本当はB-4に残るつもりはなかった。現在B-4に残っているジャーナリストは彼女一人だ。最初のうちはBBCもアンテン2もABCもその他多勢の新聞の記者達もいたが、オールドトウキョウで大規模なデモと暴動が数回起きて、みんなそっちへ移ってしまったのだ。B-4の暴動は陰惨で退屈な膠着状態に陥っていた。旧ソビエト兵は時折思い出したように小火器で攻撃してきたが、M3が出動すると沈黙した。戦闘中も、旧ソビエト兵捕虜とロシア人住民とネイティブ・ジャパニーズの奇妙な合同生活は続けられていた。M3の機銃掃射で死体の山ができたその陰で、旧ソビエト兵捕虜とロシア人住民の一人がネイティブ・ジャパニーズの少女を奪い合っているのをコウリーは見たことがあった。あんな腐れきった連中の流れ弾で死ぬのはまっぴらだ、という空気がアメリカ兵

の間に充満していたし、アメリカ政府がロシアとの協力態勢を何度も国際的に言明していたのでオールドトウキョウの司令部も武力による全面的な鎮圧には踏み切れなかったのだ。暴動の鎮圧の要請はアンダーグラウンドに対して秘密裡に行なわれた。支援条件は、アメリカが続けている経済封鎖の一部解除だと言われている。冷戦の終結はアンダーグラウンドの孤立化を促した。世界に類を見ない戦闘国家は冷戦構造を利用して綱渡り的なサバイバルを繰り返してきた。超大国の対立がなくなると、戦闘国家の存続は難しくなる。アメリカは新生ロシア、それにイギリスと中国の協力を得て主に東南アジアとオセアニアの国々に圧力をかけ、アンダーグラウンドへの禁輸措置を強化した。アンダーグラウンドの最大の弱点は言うまでもなく食料で、彼らは地下栽培で米と野菜を作っているらしいが、それだけで二十六万人の食料を確保するのはどう考えても不可能だ。ネイティブ・ジャパニーズつまりアンダーグラウンドが非国民と呼ぶ人々、それに準国民と呼ばれる混血の人々のアンダーグラウンド離れも徐々に進んでいるという。「別の村」の住民は羊のように強い側につくし、アンダーグラウンドのカリスマ性が失われれば準国民達も離れていく。これまでアンダーグラウンドが食料のかなりの部分を非国民と準国民の協力に頼ってきたことはよく知られている。本物の戦闘が過去のものになりつつある、とコウリーも感じている。冷戦後世界各地で頻発した民族主義的な地域紛争において、当事者からアンダーグラウンドは英雄的なシンボルとして扱われることもあった。だがアンダーグラウンドは、民族間の紛争は愚かなことである、という短いコメントを一度発表しただけだった。ヤマグチ司令官以下四十八人委

員会は今後どうしていくつもりなのか？　アンダーグラウンドでは何が起こっているのか？　食料不足はどの程度深刻なのか？　全世界が注目しているのだ。コウリーは、アンダーグラウンド国民兵士が実際に姿を現わす場所に偶然にもとどまっていたことを神に感謝した。何としてもアンダーグラウンドの内部へ入り込みビデオカメラを回したい、コウリーはそう考えていた。それは大スクープになるはずだし、ジャドソンにリアリティのある手紙を書くことだってできる、そう思っていた。

コウリーは低い姿勢を保って囚人道路を走り、二つの防御ラインを抜けて、捕虜の収容施設が前方に見える最前線の歩哨陣地に着いた。腰の高さまでの塹壕、迫撃砲に備えて壕の前後に袋詰めの土が盛られ、一定の間隔で銃眼から機銃の先端が突き出ている。警備の状況は普段とあまり変わりがない。海兵隊員がイワンと呼ぶ旧ソビエト兵はアンダーグラウンドの部隊が鎮圧にやって来ることを知らない。塹壕の底には泥水が溜まっている。沼地なので穴を掘ると水が染み出してくるのだ。UGの兵士と戦ったことがある？　とコウリーは軽機関銃のまわりにいる海兵隊員に小さな声でたずねた。

「ないよ、見たことはあるけどね、戦いたいとは思わない」

「本当に強いの？」

「よく訓練されていて、通信機や武器の性能が優れている、それに連中は奇襲しかしない、要す

るに手に負えないということだ」
「イワンにUGが来るって教えたらどうかしら？」
「どうしてだ？」
「恐れて抵抗を止めるんじゃないの」
「たぶん信用しないだろう、UGがこんなところへ来るわけがないと思うはずだ、オレだって信用していないんだよ」

塹壕のすぐ前には倒壊してそのままになっている鉄条網がある。砕けたコンクリートの支柱が湿った地面に突き刺さり、鉄条網に絡まったままの干涸びた鳥の死骸がいくつか目につく。その先に見える収容施設は徹底的に破壊されていて人影がない。バスケットコートが二面とれそうな床面積を持つ半円の屋根の建物は、B－4が巨大にふくれ上がる前のものだが今ではただの瓦礫の山に変わっている。二ヶ月に及ぶ暴動の主な舞台だったからだ。その向こうに、ほとんど無傷で残った三重の鉄条網が遮る形で、比較的新しい収容棟がアトランダムに並んでいる。コウリーは構えたビデオカメラのズームレンズを最望遠にして、収容棟のまわりに群がる捕虜達とロシア人と、それにネイティブ・ジャパニーズの姿を捉えた。収容棟に隣接してその外側にロシア人達の小屋と、非国民村のバラックがある。ロシア人達の小屋にはコンクリートが使われ、一部電気による灯りが点っているが、ネイティブ・ジャパニーズのバラックは廃材だけで作られ、電気はなく中は非常に狭そうだ。各収容棟間の鉄条網はすべて壊され支柱だけが残っている。その支柱

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.